

# 反省的意識の働きに先行するもの

## — 日常普段の生活過程における行動の特徴 —

### (その1)

杵 淵 俊 夫\*

(平成4年10月29日受理)

#### 要 旨

本稿は、反省的意識の働きに先行して既に営まれている心身の諸活動、前反省的・前意識的な諸活動に着目して、それらに一般的に見出される——反省的意識の調整や統御の働きに基づく目的や体系性とは異なった——まとまりや方向性の固有の枠組を指摘するとともに、前反省的なこの種の活動と反省的な目的意識的行為との間の相互作用のあり方を考察することを目的としている。前反省的な心身の諸活動は日常普段の生活過程の殆ど大部分を占めて広がっているものであるが、またそれはそれ自体として享受されるものであって、生活上われわれの目的や価値の源泉ともなっている。それはいわゆる「感性」的な活動のあり方と重なり合う。「個性」とは個人が所持している固定した特性ではなくて、全心身の働きを統合する活動の過程で実現される、彼に固有のその統合のあり方であるが、それは反省的意識——いわゆる「知性」——の働きが感性的な活動諸過程を根本的に再構成しようとするような活動において、最も典型的に見出すことができる。本稿は、この考察の前半部を記述したものである。

#### KEY WORDS

反省的探究 reflective inquiry                      実際の知識 practical knowledge  
生活世界 life-world                                      身体図式 schéma corporel  
前反省的・前意識的活動 pre-reflective, pre-conscious action                      感性 sense

はじめに：問題関心と課題の設定

—— 反省的意識の働きを生み出し、統合し、意味づけるもの ——

- 1.) 反省的意識の働きに先行するもの  
    —— 日常の生活過程における活動の前反省的・前意識的性格 ——
- 2.) 前反省的な活動の諸過程に「まとまり」を与えるもの  
    (以下、その2.)
- 3.) まとまりのある前反省的活動が帯びている一般的な諸特性
- 4.) 反省的意識の働き  
    —— 前反省的諸活動の再構成 ——

おわりに：「感性」的と呼ばれているものと「個性」的と呼ばれているもの

---

\* 教育基礎講座

## はじめに：問題関心と課題の設定

—— 反省的意識の働きを生み出し、統合し、意味づけるもの ——

われわれの日常普段の生活の過程においては、専ら反省的意識の統御の下に遂行されるような行為、完全に意識的で意図的な行為というようなものは、殆ど存在しない。そこでは、例えば、一見したところ反省的意識の一貫した支配がまったく明白であると思われる行為、即ち、その意味内容が明確に限定された一定特殊な目的を主題的に意図しつつ遂行する行為といえども、その意図、目的の意識のうちには既に、行為の主体自らのそれと意識せざる——自明のこととされた——他の諸動機の混入を許して、それらのものの支持や深い影響を受けて為されているというのが通例である。まして、その主題的な意図を成就すべく遂行される現実の具体的な行為の過程、通常一連の部分的な行動や動作から成るひとまとまりの行為が包含し担っている諸関係、諸条件と諸結果は、その中の僅かな一部分を除けば、もはや当の行為主体の意識的な掌握の下にはない。そして、その種の極めて意図的な行為の前後には、それと直接に連続し、間接的にそれを支えて、もはや反省的意識に導かれて意図して為すというような種類や水準のものでは決してない、多種多様な行動と精神生活の諸過程が、海のように広がっている。

勿論、このように述べたところで、それは新たな事態や事実の指摘を意味するものでは決してない。それは、ただ、既に以前から、意識の働きの「焦点的」であるとともに「断続的」な性格とか（例えば、W. James）、意識の「指向性」（E. Husserl）というような表現を用いて象徴的に指摘され注目されてきた事実を、改めて、逆の仕方でも——即ち、反省的意識の働きを取り囲んで支えているものの側から——確認しているに過ぎない。しかし、それにもかかわらず、既に周知のこの事態、焦点的な反省的意識の働きの縁辺を成して、前反省的な諸活動——行動や精神生活の過程——が広範に展開しているという事態に注目することは、重要な意味をもっている。反省的意識の働きに先んじて既に展開されているところの、前意識的な諸活動は、それが反省的意図によって導かれているものでないからといって、無秩序で散漫な、その場限りの反応の寄せ集めというようなものでは決してない。前意識的な諸活動は、それぞれそれなりに安定した、反復可能であるようなまとまりと方向性をもって展開されており、それぞれ固有な一定の感情や情調に彩られている。また、それらの諸活動は、相互に無関係に孤立して継起し、ただ並存して進行しているだけのものでもない。それらの諸活動をそれぞれまとめて、固有の仕方でも彩っている諸性質——感情や情調——は、さらに相互に誘いかけ合い、反発し牽制し合い、浸透し合って、当の活動主体の生活の諸過程の広がり全体を覆う、或る安定した、一定特殊な情調を帯びた、彼特有の活動傾向を構成している。そして、前反省的な精神的諸過程や行動が帯びている、まさにこの種のまとまりと方向性こそ、われわれが、本稿において特に関心を抱いて注目するものである。われわれの問題関心をさらに具体化して列挙すれば、それはこうなる、即ち、前反省的な行動や精神的諸過程にそれぞれ一定特殊なまとまりと方向性を与えているところのものは一体何か、それぞれの前意識的な諸活動のまとまりに共通して見出される一般的な傾向や特性として、如何なるものが指摘され得るか、前反省的な諸活動のこの種のまとまりと反省的意識の働きによって生み出されるところの意図的行動の目的・目標とは、どのような仕方でも相互に作用し合っているのであろうか、等々と。

さて、前意識的な行動や精神生活の諸過程のそれぞれに固有のまとまりへと、われわれの関心が強く惹かれる主たる理由を挙げるとすれば、それは、第一に、それこそが、反省的な意識

の働きに先んじて、既にわれわれの活動——行動や精神生活の諸過程——をそれぞれ方向づけ、内部的に分節化するとともに、他の前後の諸活動の過程と相互に働きかけ合って、日常生活を広く覆う一定の脈絡を成すものへと発達していくところのものであるからであり、第二に、それこそが——或る一定の条件の下で——反省的意識の体系的な働きにおける主題的関心、ひいては計画的な活動の意図へと発展するに至るものであるからである。前意識的な水準において活動しつつ、われわれは、個々の活動の状況を彩っている一定の固有の性質を感受しているし、活動の状況全体に広く浸透しているこの種の性質または情調の持続と展開の動きを通じて、或る過程の始まりと絶頂とその終わりを、そしてまた新たな別の過程や状況の始まりを感知している。そこでは、反省的意識の統御や調整とは異なった仕方、ひとまとまりの活動の過程がさらにその諸部分へと分節されつつ、それらの諸部分が相互に調整されて、方向づけられている。反省的意識の働きに先んじて、それとは別個に、活動している身体——心身、または身体＝精神 body-mind——が、それ自らに固有の仕方、活動の状況の事態に関する情報を感受して、自らその活動を秩序立て、その方向を調節している。前反省的な行動や精神生活の諸過程をそれぞれ彩り統合している、この種の固有の性質又は情調の働きはそれだけにはとどまらない。それはまた、反省的意識の働きを生み出す母胎でもある、というより、それ自らが、一定の状況、一定の条件の下で反省的意識の問題関心や目的意識へと転化・発展していくところのものである。前意識的な水準において、その種の性質を感受しつつ、それに導かれて活動しながら、われわれはまた、或る活動の状況を「問題的」problematicなもの、即ち通常の活動状況とは異なった性質や情調を帯びたものと感じ取る。そして、その活動を中断して、「問題的」な事態をもたらしている諸条件を反省的に探究し認識しようとする。かくして、問題関心を明確に限定することによって構成された、その場合の課題ないしテーマの意識に導かれて、体系的に調節された反省的探究が展開されることになるが、この探究活動の過程は、一定の意図的な行為——新たな条件を考慮しつつ設定された一定の目的と、その目的に至る一連の手段としての諸活動の観念とを念頭において、それを意識的に追求しつつ遂行されるような行為——を再建して、終息する。

ところで、環境の諸条件または心身の既存の活動諸傾向の——あるいはその双方の——変化に由来する、前意識的な行動や精神的過程の頓挫・停滞に際して、その活動の状況に「問題」を感取して、その「問題的」事態を反省的に意識化しつつ、その事態の分析的な認識・解明に務め、かくしてその認識に基づいて新たな活動を意図的に再構築するという、この（活動の過程における危機的状況に臨んでの）一連の操作の過程は、日常生活の諸過程のうちでもとりわけ諸個人の振舞の「個性」的傾向を際立たせる過程である。ここでは、前意識的・前反省的な心身の既存の活動諸傾向の全体が、可能な限り意識化されて動員されつつ、相互に再調整される。ここで意識化され調整されて働かされているのは、当の活動主体の単に或る部分的な活動傾向や特殊な能力だけでは決してない。ここでは、さらに、彼が反省的に操作する諸概念（知識）の体系や価値の諸観念が、前意識的な活動の諸過程と相互に作用し合い、新たに再建される意図的行為の目的や意図において統合される。この一連の過程を彩るところのものは、行為主体の単に部分的な活動傾向や特殊な能力における個々の特徴、即ちいわゆる「個人差」individual difference というようなものではなくて、彼自身の人格の全体としての働きにおける特徴的な傾向であり、いわゆる「個性的」individual な傾向と呼ぶに相応しいものである。個性的な傾向を發揮し実現する諸行為、反省的で「知的」intellectual な行為を生み出すものは、

前意識的な心身の活動の諸過程であるが、この前意識的諸過程は、また、目的意識的な反省的探究の働きを通じて遂行されるところの、行為主体の活動傾向全体のあり方の再調整と新たな行為の再建という個性的な操作の過程を通じて、それ自体再構成され、新たな仕方の意味づけられるわけである

反省的な体系的思考や評価の行為は、限定的に構成された課題・テーマに基づいて、活動の状況を構成しているできごとや事物のそれぞれ一定の傾向や特性に分析的に着目して、その傾向・特性が他のできごとや事物の諸傾向・特性との間で担うところの諸関係——諸条件および諸結果、つまり、当該できごと・事物の当面の「意味」meaning——を解明し認識することをめざす。一方、前意識的な行動や精神的過程においては、われわれは、活動の状況あるいは事物やできごとを、多様な諸性質を帯びたままのその全体において直接・一挙に感覚し、味わい、所有する。それらの豊かな諸々の性質や情調を全体として感受しつつ、その手応えに方向づけられて、われわれは、その直接性において且つ多面的な仕方、状況やできごとに対応し、事物を取り扱う。ここでは、われわれは、主として「感覚的」および「感情的」性質に基づいて、いわば「感性的」に sensibly 行動している。本稿は、この種の「感性的」な活動の過程が帯びる一般的な諸特性・傾向について、考察しようとするものである。

### 1.) 反省的意識の働きに先行するもの

—— 日常生活過程における諸活動の前反省的、前意識的性格 ——

本項において、われわれはまず、日常普通の生活の諸過程には、まさにそれと意識して主題的に意図して為されたのではない種類や水準の諸活動が、その全面を被って圧倒的な仕方、広範に存在している、という事実を指摘し確認したい。

ところで、「前」反省的、「前」意識的な pre-reflective, pre-conscious 行動や精神的過程について言及するからには、そのための準備段階または論理的前提として、何よりもまず初めに、反省的意識の働きということ、つまり、まさにとどのような特定の形態の活動が意味されているのか、その具体的な意味内容と代表的な活動形態の事例が指摘されなければならない。反省的意識の働きを特徴づけるものは、体系的な思考活動、即ち一定の目的の意識に基づいて、その観点から一貫して連続的に調整された思考活動の過程である。反省的な意識の働きは、それに先行する活動の状況の「探究」inquiry という形態をとった体系的な思考活動とともに始まり、この思考活動を通じて既存の活動諸過程を再構成するが、さらにそれは、その新たな構成し直された意図的行為の目的、「志向目的」end-in-view の意識としてその行為を導く。そして、この種の体系的な思考活動の介在に先んじて既に展開されているのが、前反省的・前意識的な種類・水準の行動や精神生活の過程なのである。(John Dewey, EXPERIENCE AND NATURE, 1926, The Later Works, Vol. 1, Southern Illinois U. P., p. 15., LOGIC; THE THEORY OF INQUIRY, 1938, especially Chap. 4 Common Sense and Scientific Inquiry, The Later Works, Vol. 12, pp. 66-85., 魚津邦夫訳『論理学』, 上山春平編『世界の名著48パース ジェイムズ デューイ』, 中央公論社, 所収, pp. 448-469.)

反省的意識の働き、換言すれば体系的思考活動がその極限に至るまで殆ど十分に展開されている、その最も典型的な場合の事例は、諸科学の特殊専門的な探究活動において見出される。

さらに、社会生活の諸領域で遂行されている、特殊専門的な社会的諸活動の過程には、一貫して詳細に規定された目的や目標の観念が見出されるし、それに基づいて遂行される十分に発達した反省的で体系的な探究の操作が含まれている。特殊に専門的な政治的行為、例えば政策の立案・制定やその執行、組織的に展開される政治的・社会的運動、それ自体として自己目的的に遂行され、したがって特殊専門的に推進される経済政策的・営利的な諸活動、特殊な教義や儀礼の体系的装置を伴った宗派宗教の諸活動、制度的・計画的に遂行される教育実践活動や学習活動、普段の生活過程から遊離して自己目的化しつつ発達したレジャー活動等を、その種の代表的な事例として指摘することができるし、また軍事的戦略行動や医療活動、社会福祉活動等の諸過程にも同様の一貫した反省的意識の統御の働きを見出すことができる。この種の諸活動もまた——その諸過程の至るところで、前反省的な行動や精神的働きの広範な浸透を受けているとはいえ——やはり基本的には、反省的意図を焦点づけることによって構成された一定の観念に基づいて、活動の諸過程が連続的に一貫して調整されつつ遂行される活動である、という性格を帯びている。

ところで、前述の如く、反省的意識の働きが殆どその極限に至るまで——体系的思考活動として——十分に展開された場合の事例を、われわれは特殊専門的な科学的探究活動に見出すことができる。そこで、次に、この専門科学的な探究活動に一般的に見出される活動上の手順を確認し、この種の活動を、ひいては一般に反省的意識の働きを特徴づけている傾向を指摘したい。専門科学的探究は、客観的な、即ち一般的に検証され得るような(事態)の認識を確立することをめざす。科学的探究は、それぞれ固有の、極めて一面的に特殊化された研究上の専門的な観点を既に確立しており、当該観念に基づいて展開されたこれまでの探究活動の成果として、当該専門領域における一般的諸概念とその体系としての一定の理論を所持している。個々の探究活動においては、研究者は、当該専門領域に固有の一般的な研究上の観念に基づいて、既存の諸概念の体系——特にその一部分——を用いて、当面する問題の状況について、その多種多様な構成要素のうちの、特に或る特殊なできごとや事物、しかもそのできごとや事物の或る特殊な一面、一部分(例えば、或る特殊な特性や機能等)だけに着目し、それらを当面の問題に直接関連する諸「事実」「データ」the facts of the case, dataとして(かの既存の諸概念を用いて)構成し記述する。それと同時に、彼は、それらの諸事実・データを用いて、当面する状況の問題的な性質や存在形態を必要とされる限り具体的に説明・解釈することができるような命題——即ち、条件ないし原因と結果の関係の表現——を「仮説的観念」hypothesis, ideaとして構成し提示するが、この種の仮説的観念はさらに、当該専門領域の既存の概念体系に依拠しつつ遂行される演繹的操作(いわゆる「推理、推論」reasoning)によって、それが内包している意味内容が分節・展開され、結局一定の明確に規定された検証の操作手続きを示唆し指示するに十分なほどの具体的な命題の形式にまで、導かれる。そして、最後に検証の手順がくる。これは、具体的に展開された仮説的命題がそれ自ら指示するような、一定の明確に規定された検証の手続きを実行すること、である。

そこで次に、上述のような手続き・操作の諸過程から成り立っているところの専門的な科学的探究活動に一般的に見出される特徴的な諸傾向を指摘して、それについて考察したい。第一に、その種の探究活動を特徴づける根本的な傾向として、それに先行して存続し展開している、日常的な前反省的・前意識的な水準の行動や精神的諸過程を、それがまさに「問題的」な性格のものとして看做して、それらを変革し再構成する過程であるということが、指摘される。或る事

態、例えば生活や行動の或る状況、またはそれを構成している或るできごとや事物——さらにはそのできごとや事物の或る特性や機能——のあり方、それらが担う諸関係や意味を一定程度明確に意識するということは、それらがあるがままに眺めて傍観することを意味するのでは決してなくて、それらを他ならず「問題的」なものとして意識することである。この場合、われわれは、改めて問うまでもなく自明のこととして既に没頭していた通常の或る生活の過程、前反省的な或る行動や精神的過程を故意に抑制、中断して、その事態を当該活動過程の継続的な遂行にとって「問題を孕んだもの」と看做し、その「問題的」な事態の意味——その具体的な種別と詳細な機制——を解明すべく、その過程を改めて展望しつつ分析的に点検しようとする。いうまでもなく、或る事態を問題的な性格のものとして感じ取る意識は、この種の意識の働きそのものの性質上、自動的には、つまり当該事態の客観的な構造とその変化のみに基づいては生起しはしない。問題、問題的事態は、まさにそのようなものとして既に初めから、客観的に——つまり活動諸過程の意味を前反省的に感受し意味づけているところの、活動主体における主観的な（前反省的な）意識態度とは別個または無関係に——存在しているもの、人がただそれにあるがままに気づきさえすればそれでよいもの、では決してない。問題的事態とは、まさに特にそのようなものとして積極的に感じ取られ看做されたもの、活動主体がそれに直面して、端的に自らの意味感受の体制や活動傾向を主観的・内面的に再構成しつつ、その新たな意味理解の体制に基づいて注目するに至った、当該事態の一定側面である。だから、問題的な事態の出現または意識化ということとは、或る意味で、主観的な構成的操作の契機を含んで初めて成り立つものであり、活動主体における内的な意味体系の働きの端緒的な再構成の過程を伴って展開するものである。同一の事態、行動状況の同一のあり方は相異なる行動主体によって等しく問題的なものとして看做されるとは限らないし、ましてそこに同一種類・同一の意味内容を帯びた問題の存在が意識されるとは必ずしも思われない。最後に、或る行動の状況を一定特殊な意味において問題視するということは、とりもなおさず当該状況の一定の変革を意図することでもある。それを問題を孕んだものと看做して当の状況に臨むことは、当該状況に——活動主体の内面において再構成されていく内的な意味体系に基づいて——一定の改まった意識的態度をとり始めることであり、そのことは、特にその状況を再構成しようとする新たな反省的意識の働きの、ひいては新たに遂行される意図的な変革の行為の端緒、第一段階となるものである。

反省的意識の働きを代表するものとしての、専門的な科学的探究活動の諸過程に見出される一般的な特徴的傾向として、第二に、そこには、その意味内容を一面的に限定された、当該専門領域に固有の一定の観点と、それに依拠して構成された専門的諸概念の一体系とが、探究活動の諸過程や諸操作を一貫して限定し方向づけるものとして、鋭く意識されて働いていることが、指摘される。個々の探究活動を主として導くものは、この種の特殊専門的な概念（意味）体系のうちの或る一定の部分、一定特殊な部分的な意味の脈絡であり、当面する状況の問題的な事態の性質に応じて、特に探究活動の主体の内面において焦点として注目され、意識化されるに至った一定の意味の脈絡である。活動主体は、一方では、自らの内面で働いている専門的な概念体系から、この種の一定特殊な意味の脈絡を焦点化し、この場合の探究活動の主導的観点を成すものとして構成しながら、他方では、その意味文脈を観点として、問題的事態を成す当の状況を展望し、その構成諸要素としてのできごとや事物、あるいはそれらが帯びている諸特性や機能のうちから、或る特殊なものを事実やデータとして選定し、それらの事実やデータ

の一定の関係のあり方として当の問題的事態を解明するに足る仮說的観念を構成する。設定される探究活動の観点の厳密な一面性とそれに基づいて成される諸段階の操作の論理的な首尾一貫性——これこそまさに、専門的探究活動を他のすべての日常生活の諸過程から際立たせるところのものである。専門科学的な探究活動、特に極めて長期にわたる、複雑多岐な諸目的を含んだ、他人数共同の探究活動が、その諸段階の手順や操作において首尾一貫して体系的・計画的に遂行され得るのは、それらの部分的諸活動、諸過程が一義的に規定された特殊専門的な観点——即ち、共同探究者に共有された、かの概念体系の一定特殊な意味文脈——によって、厳密に統制されて遂行されているからである。その探究活動の成果たる理論が客観的に検証され得るのも、またこの種の観点の意味内容の一義的規定性と、それに基づく論理的に一貫した操作手続きにそれが依拠しているからである。当該理論の提案者とは別の人々の手によって、まさにその同じ探究活動の諸操作・諸過程が厳密に辿り直され、かくしてその結果として構成された当該理論がその客観的性格を保証されるというわけである。

専門的な科学的探究活動の諸過程に見出される、第三の一般的な特徴的傾向として、そこで取り扱われる「対象」object——即ち、「事実またはデータ」と「仮說的概念」——が、或る特定の意味だけを担うものとして厳密に一面化して構成され、特殊専門的に限定されたその一義的な意味において専ら操作されているということ、即ちその対象の特殊専門的で抽象的な性格を挙げ、また第四の特徴的傾向として、そこで対象が取り扱われる場合の、その諸々の操作や手続きの体系的に一貫した性格を指摘したとしても、これらの指摘はもはや新たな特徴的傾向を意味するものとはならないかもしれない。これらの特徴はいずれも、既に指摘した第一および第二の、より一層根本的な傾向と結びつけられて初めて、その具体的な意味内容が首尾一貫したものとして理解され得るものとなるような種類のものであるからである。ただし、ここで念のため指摘しておくべきことがある。それは、専門的な科学的探究活動において構成されて取り扱われるもの、いわゆる対象の、その意味内容において特殊専門的に限定された、加工や構成の操作の産物としての、一面的・抽象的な性格である。既に指摘した通り、探究活動においては、問題的状况の特殊に限定された一局面——特定の或るできごとや事物、さらにはできごとや事物の特定の特性や機能等——のみが専ら注目されて、その操作の一貫した対象とされる。当該状況におけるそれ以外の多様な諸局面は、さしあたり知るに値しないものとして、取扱いの範囲から除外され捨象される。状況そのものが、あるいはできごとや事物が、一定特殊な一面的に限定された主題的な観点の意識の下に選択・加工と構成の諸操作を何ら施されることなしに、多様な諸々の特性と機能を帯びた、まるごとそのままの全体において、直接に注目されたり取扱いの操作の対象とされたりすることは、ここではあり得ない。それらの対象を取り扱う諸操作はすべて特殊専門的な性格のものであって、一定の科学的専門領域の既成の理論、専門的に規定された諸概念の体系、そのうちでも特に当面の事態に関わりのある一定の部分的な体系的意味の脈絡に専ら基づいて初めて可能となっている。(Max Weber, *Die "Objektivität" Sozialwissenschaftlicher und Sozialpolitischer Erkenntnis*, 1904., im *GESAMMELTE AUFSÄTZE ZUR WISSENSCHAFTSLEHRE*, 4. Auflage, J. C. B. Mohr, 1973. 富永祐治・立野保男訳『社会科学方法論』, 岩波文庫, 1967., John Dewey, *LOGIC; THEORY OF INQUIRY*, 1938, especially Chap. 6 *The Pattern of Inquiry*, *The Later Works Vol. 12.*, pp. 105-122, 魚津邦夫訳『論理学』, pp. 488-506.)

さて今や、われわれは本項の主題を成すテーマ、つまり反省的意識の働きと結びついて、それを規定しつつ展開している、その周囲の前反省的・前意識的な活動諸過程の広範な広がりを、日常生活の諸過程の具体的な現実在即して指摘することに、とりかからねばならない。それは、次のような三つの種類ないし段階の手順を踏んで行われる——即ち、第一に、反省的意識の働きを体現している、体系的思考活動やその結果を含んで遂行される目的意識的な行為の前後に存続し展開しているところの、前反省的・前意識的な活動諸過程の広範な広がりを指摘し、第二に、反省的意識の働き（を体現している、反省的探究活動や目的意識的な行為）が、それ自らの構成要素の圧倒的部分として、前意識的な種類・水準の多様な活動諸過程を組み込んで初めて成り立っているものであることを指摘し、そして第三に、反省的意識の働き（を体現している、体系的思考や目的意識的な行為）のまさに焦点を成す部分にさえ、前反省的な種類・水準の活動諸過程が浸透し機能していて、その両者の融合によって初めて反省的意識の働きが成り立っているという事実を指摘すること、である。

上述の第一段階のテーマ、つまり反省的意識の働きを具現している、種々の体系的思考活動や目的意識的な行為の前後に、それらの働きがいわば「図」として浮かび上がってくるころのもの、「地」として、前反省的・前意識的な活動諸過程が既に広範に展開されているということは、殆ど改めて指摘するまでもない、周知の事柄である。われわれの生活の諸過程を可能な限り広く展望してみても、それ自体の意味する諸内容をまさにそれと反省的に意識しつつ為すような種類や水準の行為——観念の操作等の精神的諸過程をも含んで——が占める部分は、思いの外わずかである。専門的な科学研究者といえども、厳密に反省的意識によって統制された特殊な研究上の思考活動に、それほど多くの時間直接に従事しているわけではない。その種の研究上の思考活動は、彼に対してその意識の働きにおける極度の緊張を強いるのであって、人は誰でもそのような意識的緊張に長時間耐えることができるわけではない。むしろ、比較的長い時間または期日にわたる精神的な休息や余暇を挟んで、彼は自らを鼓舞激励しつつ、かの意識的緊張の高みへと再び登りつめようとするわけである。このような事情は、また、反省的意識の統制の下で意図的に遂行される——既に指摘したような——特殊専門的な社会的諸活動に従事している人々においても、それぞれ程度の差はあれ、同様に妥当する。政策の立案やその執行に従事する者、社会運動のリーダーやオルガナイザー、宗教活動家や聖職者、医師や法律家、専門分化した企業経営者、学校の教師や児童・生徒たち、軍事行動の指揮者等。これらの特殊専門的な公的・社会的諸活動に従事している人々においても、固有の意味において反省的・目的意識的に高度に統制された行為を遂行する、比較的短い努力の過程を取り囲んで広がっているのは、その種の目的意識からはもはや自由な——単に私的な、多種多様な意図や好みや感情・情緒が相互に混淆し相殺し合って、ゆるやかに支配し合うような——いつも通りの前意識的な種類・水準の活動諸過程である。特に反省的・意識的といわれ得るような、その種の特殊に専門化された諸活動の外部あるいはその前後の脈絡を埋めて、広範に展開しているものは、特定の専門的な意図や目的意識からは離れた、もはや反省的意識の観点やその体系的調整の努力によって繋ぎ合わされてはいない、通常の生活の諸過程、だがしかし、われわれにとってむしろ一層馴染みの深い、親しみ慣れた日常普段の生活諸過程である。

勿論、この種の日常普段の前反省的・前意識的な行動や精神生活の諸過程を、それらがすべてただ単一の種類・水準に属するものとして、それら相互の間の極めて重大な意味を帯びた諸々の差異を無視して、安易に混同して取り扱ってよいとは決して思われぬ。首尾一貫した反省



的意識の直接的な掌握下にある体系的な思考活動や目的意識的な行為と、専ら肉体的・生理学的な諸条件に基づいて生じる反射反応との間には、広大な生活活動の領域が広がっている。その広大な領域を埋めて広がっている多種多様な無数の生活活動に「前意識的」または「前反省的」pre-conscious or pre-reflective というような単一の呼び名を付して、それで事が済み、その実態がより明らかになるとは思われない。というより、反省的意識の働きと生理学的・生物学的な反射反応との間にあって、未だに一貫した問題関心に基づいた注目や研究上の取扱いを殆ど受けることなく放置されてきた、多様で雑多な行動や精神生活の諸過程の広大な広がりを、さしあたりまとめて指摘し表現する場合に、何らかの呼び名も必要なので、前掲の如き名称がそれに当てられている——というのが、現実の実情である。この種の前意識的な種類・水準の行動や精神生活の諸過程の広がりの中でも、反省的意識の——言語や意味体系に基づいて為される——意識化の作用を比較的強く受けている部分もあるし、その働きを未だ殆ど受けていない、衝動的または反射的な性格の強いものもある。習慣的・慣習的な働きによって強固に組織化されている部分もあるが、その種の働きが十分に及んでいないために、衝動的に散漫で、流動的に、あるいは爆発的に展開される諸過程もある。さらに、何らかの意味の脈絡に即して調整されつつ展開されている、どちらかといえば意識的な活動の水準に近いものから、主として身体や感覚の直接的な反応の機制によって、諸反応間に一定のまとまりや連続性が保たれているような種類のものに至るまで(いわゆる意識の「縁」または「房」fringeと「地平」horizon)、殆ど無限の差異と多様性が見出される。だが、しかし、本稿の問題関心は、主として、前意識的な種類・水準の諸活動が、その全体において共通して帯びているような、一般的な特性や機能に向けられている。その種の一般的な観点から見られた、前反省的な諸活動の特性や機能と、反省的意識の働きとを比較すること、およびそのように主として一般性または連続性において見られた前反省的な活動の諸過程が反省的意識の働きと結びつき、相互に作用し合う場合の、その仕方・様式を明らかにすることが、本稿の狙いなのである。したがって、ここでは、上述したような、前意識的水準の行動や精神生活の諸過程の、相互の間の特性や機能における多様な差異は、ひとまず問題関心の焦点や枠組から除外されることになる。

次に(第二に)、反省的意識の働きを体現している、体系的思考活動やその結果を含んで遂行される目的意識的な行為が、それ自らの構成要素の圧倒的部分として、前意識的な種類・水準の多様な活動諸過程を組み込んで初めて成り立っているものであることが、これまた既に自明のことながら、改めて確認されなければならない。反省的な思考活動や目的意識的な行為の過程は、今まさに意識の焦点的な対象としてその注目と掌握の下にある、或る単一の操作や行為の過程だけから成り立っているわけでは、勿論ない。反省的意識の注意の対象を成す、その種の操作や行為の過程は、空間的(共時的)にも時間的にも相互に密接に関連し合って、連続して広がっているところの、広範な活動諸過程の脈絡のなかの一部分、一点である。自らが為すところの一定の行為や反省的な操作の過程を意識するということは、より具体化していえば、当該の行為や操作の「意味」meaningを意識することであり、さらに行為や操作の意味とは、当該の行為・操作が——それ自体がその一構成要素を成しているところの当面の行動の脈絡の継起の広がりにおいて、ひいてはそれらの行動諸過程がさらにその中の一構成部分となって連続しているような、諸々のできごとの継起の広大な関連の動向において——担っている諸「関係」のことである。これらの意味、あるいは関係は、通常当該の行為・操作の生起の諸条件およびそれが惹き起こす諸結果として意識される。そして、この場合、その諸条件および諸

結果とは、当該の行為・操作の生起を条件づけるものとして、またその行為・操作によって逆にその生起を条件づけられるところのものとして、当該行為・操作に先行しまたはそれに後続して展開する、他の活動諸過程やできごとの系列を意味している。そして、反省的意識の主体によって、或る反省的操作や意識的行為の着手に先立って予め意識されることの意味、即ち、当該操作・行為が担っている諸関係のうちで、今特に注目されているものの範囲は、勿論比較的直接的な、いわば手近な諸関係に限られている。それ故に、反省的意識の働き、体系的思考活動の操作や目的意識的行為は、それだけで孤立して完結しているものでは決してなくて、むしろ、相互に連続して展開している広範な活動諸過程の、さらにはそれらを取り囲んで生起しているできごとの広大な諸関係の広がりの中で、今特に焦点を成す部分として意味づけられて遂行されているものなのである。だからまた、反省的意識の働き——体系的思考活動や目的意識的行為——は、それ自体の外部に既に広がっている多種多様な活動諸過程やできごとの継起の脈絡を、それ自らの出現と存立にとっての不可欠の条件、契機または構成要素として予め前提しているわけである。

次に具体的な事例を挙げて説明してみよう。就職試験に臨む学生も、予定されていた大手術に従事する医師も、企業の将来に決定的意味をもつ契約をとり交わした経営者も、当該行為の舞台へは、歩くか車に乗るかして赴いている。歩いたり車を運転したりする行動の過程やそれに付随したできごとは、通常、かの意図的に企画され遂行された焦点的な行為と結びつけられて、その意味内容を成すものとしては、意識されていない。しかしだからといって、その両者が無関係であるかといえば、そうでもない。それらがあながち無関係ではないこと、後者、即ち日常的な前意識的水準の行動諸過程が、前者、即ち当面の意識の焦点を成す反省的・意識的水準の行為と連続していて、その構成要素を成しているということは、例えば歩きまたは車の運転の途上で或る種の事故が生じた場合等を考慮すれば、明かになる。その時には、肝心の焦点を成す、かの意図的な行為の遂行が頓挫してしまう。読書の事例はもっとわかり易い。読書の過程、その或る特定の時点で、われわれがまさに意識して——理解し味読すべく——注意を傾注しているのは、或る主人公の、特に或る言葉や所作や態度・表情（の記述）であるが、そのように注目している時、われわれは、それ以前に既に読み取ってきたところの遥かに膨大な物語の推移と展開の場面をも、同時にありありと意識して辿っているわけではない。既に読み終えた部分を同時に意識して辿り直しつつ、今日下焦点を成している場面の記述の意味を読み取り理解しなければならないとしたら、われわれ読者の意識は分裂してしまう。主人公の或る所作の記述を今日下——意識の焦点として——辿る時、われわれがこれまで読み取ってきた物語の多様な場面とその展開の諸過程は、或る一定の圧縮された意味の集合体ないし背景的文脈として、われわれによって直接に感じ取られている——例えば、物語の全体として雰囲気や情調、あるいは筋の展開の見込みや展望として、主人公の性格や行動の傾向として、さらには彼を取り囲む環境や状況の独自の特質として、等々。その種のものは、反省的意識によって再び、三たび繰り返し辿られるのではなくて、物語の全体としての雰囲気や情調として、あるいはまたそれらの雰囲気や情調の内部的に分節化されたものとして、読者によって直接に把握され保持されているのであって、目下の注意の焦点を成す主人公の所作（の記述）の理解の背景的文脈となってその理解を支え、その理解のうちに入り込んで働いているのである。既に読取られた物語の諸過程についての、この種の情調——いわば直接的な意味の脈絡——としての感取・把握と保持の働きを前提にしなければ、今日下辿られている個所の理解は、まったく

意味内容の貧弱な、無内容のものになってしまう。新しい小説をまったく途中からいきなり読み始めてみれば、誰でもそのことに気づくであろう。この場合には、目下の焦点を成す或る記述が、その十分で適切な理解の前提として既に包含しているはずの、濃縮されて現前し機能している、豊かで広大な——多様な情調で彩られた——直接的意味の文脈を、われわれが未だ所持していないわけである。(J. Dewey, EXPERIENCE AND NATURE, The Later Works, Vol. 1, p. 231., INTRODUCTION to ESSAYS IN EXPERIMENTAL LOGIC, 1916, The middle Works, Vol. 10, p. 323.)

このような事情は、日常普段の生活過程における言葉の使用や表情・態度等による表現の場合でも、変わりはない。日常の会話における言語的表現は——それが意識的に為されている時でも——それ自らの固有の一定不変の意味内容を、そしてただそれだけを担って表示しているわけではない。そうではなくて、それは、会話の成員に共有されている一定の「背後期待」background expectancy, 即ち見られてはいるがしかし気づかれていない、日常的場面の背後に働いていると期待されている、社会的に標準化された生活態度を前提として、それに依拠しており、特にその或る特殊な部分的脈絡を「さし示すもの」pointing to, その「例証的な資料」documentary evidenceとして働いている。「聞き手が、対話で用いられている大部分の表現の意味を確定できるのは、次のような場合だけである。つまり、聞き手が、話し手の生活誌や彼の目的について、またその発話がなされた状況について、あるいはこれまでの会話の進行過程について、およびそれぞれの表現の使用者とその聞き手の間に存在する現実的なもしくは潜在的な相互作用の特殊な関係についてなんらかのことを知っているか、あるいはそれを想定している時だけである。——それぞれの表現は、それがどのような場面で使用されようとも全く同一のまま、というような意味を帯びてはいないのである」(H. Garfinkel, Studies of the Routine Grounds of Everyday Activities, in STUDIES IN ETHNOMETHODOLOGY, Prentice-Hall Inc, p. 40.,「日常活動の基盤——当り前を見る——」, G. サーサス, H. ガーフィンケル, H. サックス, E. シェグロフ著, 北沢裕, 西阪仰訳『日常性の解剖学——知と会話——』, マルジュ社, 1989, p. 40.)

独創的な専門的探究活動に従事している科学者の場合も、その事情は変わらない。彼がその反省的意識の働きの焦点において遂行しつつある——例えば、仮説的観念の構成のための——一定の観念操作は、その前提条件またはその不可欠の構成要素として、次のような前反省的な水準の活動諸過程を含んで成り立っている、即ち、当該探究活動に先んじて為されていたところの、彼の心身の健全な状態を維持するための雑多な行動や精神生活の諸過程、彼を——日常の私的および公的な雑務から免れさせて——当の独創的探究活動に専心することを可能にしてくれる、周囲の種々の人々との間の人間関係を円滑に調整するための諸活動、彼が最先端の問題関心を自らの意識の焦点に持ち来すべく、その準備的手順を構成している諸過程において行使し取り扱うところの、通常常識的な言葉や信念や知識、さらにはその目下の独創的な観念操作を含んだ思考活動の諸過程そのものの構成要素となっているところの、(当該専門領域で既に自明のものとして通用している)諸概念の体系の、例の如き理解と取扱いの操作、等。

最後の事例として、心理学の実験的条件の下で為される被験者の反応行動の、極めて高度に意識的な性格、即ち、当該被験者において、一定特殊な観念に基づいて予め系統的に限定されて構成された、いわば人工的な操作の産物としての性格が、指摘される。被験者の反応行動は、決して直接的で、単純で、いわば自然な・生のままの反応ではないし、ましてや原初的で要素

的な性格のものでは決してない。何よりもまず、被験者となること、つまり当該実験が設定する諸条件の統制に服することを意識して決意するということは、日常普段の生活過程における通常の行動態度の諸傾向や諸特性の働きを停止して、それらを——当面の実験に関わりのある限り——意識的統御の緊張した努力の下に置くこと、それらに一定特殊な限定を加えることを反省的に理解しつつ改めて受容すること、である。次いで、提示された具体的な実験の諸条件の各個条の意味する内容、反応行動の手続きが理解され、その条件にしたがって、関わりのある限りすべての行動および精神的諸過程が、現実に統制・限定されようとする。当該実験が高度に限定された一面的な反応行動を要求するように計画・調整されたものであればそうであるほど、被験者においては、それに応じた反応行動を的確に——かくして、実験的にみて有効に——遂行するために、意識的に統制・限定されるべき行動や精神生活の諸過程の範囲が拡大され、それらの間を首尾一貫して調整しつつ統御するための意識的努力とそれに伴う緊張の度合いが高まる。それ故に、この種の実験の被験者となるには耐え得ない者が明かに存在するし、また誰でもそれに長時間にわたって耐え続けることはできない。この事例においても、意識的な反応行為が辛うじて成り立つためには、その前提条件として、前意識的な水準の行動や精神的過程において極めて広範囲にわたる事前の調整が必要不可欠のものであることが、明かとなる。そして、その種の手前の調整が必要であるのは、いうまでもなく、その両者が密接に連続しており、前意識的な行動諸過程が、反省的で目的意識的な行為の不可欠の構成部分となっているからである。

さて、最後（第三）に指摘すべきことは、反省的意識の働き（を体現している、体系的思考活動や目的意識的行為）のまさに焦点を成す部分にさえ、前反省的な種類・水準の活動諸過程が浸透し機能していて、その両者の融合によって始めて反省的意識の働きが成り立っているという事実、である。専門科学的な探究活動の過程を、その一般的な手続きの諸段階の展開の順序にしたがって辿ってみると、既に指摘した如く、それは、その一連の手続き・操作の核心に、いわゆる「仮說的観念」の着想ないし構成という手続き・操作 abduction を含んで成り立っている、ということが分かる。仮說的観念とは、当面する状況の問題的事態の具体的な意味内容を、当該状況の構成諸要素のうちから分析的に選択・加工して構成した事実やデータ——つまり、当の状況を構成しているもののうちでも特に或るできごとや事物、またはそのできごと・事物の一定特殊な特性や機能——を用いて規定し説明すべく、着想され構成される一定の命題である。仮說的観念の構成というこの種の手続きまたは操作の過程は、勿論、その基本的な枠組においては、当該専門領域の既存の理論——諸概念の体系——、特にその或る一定特殊な部分的脈絡に依拠しそれに導かれて遂行される。この場合に特に焦点化されて参照される、その種の専門的理論の部分的な或る知見が、当の問題に接近する際の特異に限定された観点を提供し、その観点に基づいて一定の仕方事実・データを選択・構成することを示唆し、かくして仮說的観念（としての命題）の可能的な形式やその範囲さえも示唆し枠づけるように働く。しかし、その探究活動が、まったく新たな問題的事態、人がこれまで直面したことの決してない、独自固有の問題的事態に関わるものである限り、その種の既成の一般的な操作の手引き、一般的な操作の用具を以て、当の事態に迫れる限界は、勿論明かに眼にみえている。その限界を越えた、その先で展開されなければならない諸々の操作・手続き——即ち、予備的に構成してみた事実・データを修正し再構成しつつ、それらを、そのそれぞれが担う意味内容にしたがって相互に関連づけることによって、一個の論理的に一貫した意味上のまとまりを成すものとなる

ように、位置づけ意味づけることができるような、この場合の包括的・全体的な一観念を、誰よりもまず自分自らに対して示唆すること——は、結局、もはや如何なる種類の既存の概念体系からも離れて、それらの支えなしに、専ら探究し思考する者の内面的過程として営まれるべき操作過程であり、まったく新たな諸概念を私的に構成しつつ、それらを想像的に操作し、それらの相互の関連を想像上試演してみる dramatic rehearsal, という形態をとる。それは、文字通り「主観的」subjective な操作の過程であり、そのままに核心的部分、仮説の着想の原初的過程は、当の探究者自身でさえ二度と繰り返して辿ることのできない、言表され得ない、真に流動的な性質の内面的過程である。仮説発想の操作過程が本来的に帯びている、この否定し難い主観的な性格は、その種の操作過程をそれ自体の構成部分として含んでいる、全体としての探究活動の問題関心や課題（その基盤を成す固有の観点）が根本的に新奇で独創的なものであり、それ故に既存の概念体系やその問題関心から遠く隔たったものであればあるほど、一層深刻になる。その場合には、私的な内面的過程として遂行されるべき操作手続きの部分が一層長大で内容に充ちたものとなり、当の探究活動の諸過程の殆ど大部分を構成せざるを得ないことになるからである。さて、一般に通用している理論的説明、その種の説明の核心を成す諸概念が、新たに直面し発見された決定的な事実・データによって否定されざるを得なくなったにもかかわらず、当の探究活動に没頭している研究者には、未だその新たな事実・データを含んで問題的事態を改めて理解し説明し直すべき新たな包括的観念、否それどころか、まとまりのあるイメージが端緒的にさえ示唆されてはいない、というような場合、——まさにこのような場合に、懸命に思考し想像的に試演しつつ、仮説的説明の観念を自らに対して示唆しようとしている、彼の内面を流れるもの、イメージとしての確かな手応えさえ未だ具えていない原初的なイメージの流動は、一体どのようなものであろうか。(John Dewey, EXPERIENCE AND NATURE, The Later Works, Vol. 1, pp. 171-172.)

仮説的観念が着想または構成される操作過程は、上述した通り、非常に不可思議な性質を帯びた過程である。それは、反省的意識の働きが最も典型的で純粋な形態をとって展開され遂行されていると考えられる、専門科学的な探究活動の構成部分、しかもまたその最も核心に位置している構成部分であるが、それにもかかわらず、そこでは、反省的意識の働き、専門的に特殊化された目的意識に基づく体系的思考の活動が、必ずしも首尾一貫して貫徹されてはいない部分である。そこではむしろ、その種の体系的思考の活動がたじろぎを見せて停滞する代わりに、——勿論、その場合の専門的領域の既存の概念体系に基づいて設定された、一定の（探究活動の操作の）基本的な枠組の内部においてははあるが——もはや当の観点や目的意識の統御・制限からは一旦離れて、想像的試演の操作が私的なし個人的に展開される。この種の私的・個人的な観念操作の想像的な試演は、場合によっては、それ自体に基本的な操作の枠組を与えているところの、当該専門領域に一般的な既存の概念体系そのものを、疑問視し再構成しようと試みることさえある。そして、ここで、われわれの主題的テーマにとって注目すべきことは、この種の私的・個人的に行われる観念操作の想像的試演の過程を支えているもの、その過程に浸透して働いているものは一体何か、ということである。われわれとしては、ここでは、ただ、少なくとも、当該専門領域の概念体系を超え出て、その外部に広がっているところの、当面する問題的事態に関わりをもつ、日常普段の生活経験に依拠した前反省的な意味の脈絡も、その種の想像的試演の自由な操作のうちに入り込んで働く一要素であり、しかも相当に重要な要素である——ということが示唆されさえすれば、一応満足である。

科学的な専門的探究活動は、かくしてその探究活動の一連の過程の核心部分に、必ずしも反省的意識の働きとしての、目的意識的な体系的思考活動が十分な仕方では浸透し統御することのできない操作過程、仮說的観念の着想・構成という過程を抱え込んでいることが明かになったわけであるが、同様の事情は、われわれが先に列挙した、制度的・計画的に遂行されている、特殊専門的な社会的諸活動においても——勿論、それぞれに固有の特殊な条件を含みながら——見出すことができる。制度的に特殊に専門化されて、専ら意図的に遂行されているように見える、この種の社会的諸活動——例えば、政策立案の、企業経営上の、教育実践家の、医師の、法律家の、軍事指導者の諸活動等々——の一連の手順のうちにも、専ら当該担当者の私的な責任のみに基づいて純粹に彼個人の内面における主観的な操作の過程として遂行されなければならないような、手順・手続きの一段階が存在している。科学的探究活動における仮說的観念の着想・構成の操作と類似の手順は、ここでは、次のような形態——即ち、特殊専門的な社会的諸活動にそれぞれ一般的なものとして既に確立されている、制度やマニュアルとしての手順・手続きを、今まさに私が直面するに至った目前の特殊的・個別的事例に対して、一体如何なる具体的な仕方では適用すべきか、という形態をとって現れる。そして、一般的に規定された行為の規則を現実の特殊な個別的事例に適用するという、この種の手続きや操作は、既に種々に言い古されているように、明かに当の行為主体の責任ある、主観的（私的）判断なしには、遂行され得ない性格のものである。如何に包括的に且つ精緻に構成された經典の戒律も、法律の条文も、軍事戦略・戦術や企業経営の定石も、病状診断の一般的処方も、道徳的格言も、教育実践のマニュアルも——さらに、それらの専門的活動領域でそれぞれ開発され発展させられてきた、龐大な内容をもつ、各種の前例や「判例」あるいは「決疑論」Kasuisitik, casuistryの伝統的装置にもかかわらず——現実の個別的・特殊な事例に望んで、それへの適用に際して自ら果たすべき、主観的な想像的試演に基づく私的な判断の手続きの遂行という独特の責任を伴った手続きの過程から、その当事者を免れさせることは決してできない。(J. Dewey & J. H. Tufts, ETHICS, (1932 ed.) — Part 2 THE THEORY OF MORAL LIFE, Chap. 14 Moral Judgment and Knowledge, ¶5 The Nature and Office of Principles, The Later Works, Vol. 7, pp. 275-283.)

## 2.) 前反省的な活動の諸過程に「まとまり」を与えるもの

日常普段の生活においては、反省的意識の働き、例えば、専門諸科学における探究活動のように体系的な思考活動が殆ど純粹な形で展開されている場合や、それぞれ専門的に特殊化されて組織的に且つ目的意識的に遂行される公的な社会的諸活動を取り囲み、その諸過程に浸透して、前反省的・前意識的な種類・水準の行動や精神的過程が広く展開されている。反省的意識の働きを体現している諸行為を特徴づけるのは、一連の操作の諸過程を根拠づけてそれを導く、極めて一面的に限定された明確な目的の観念であり、それに基づいて——各専門領域の概念体系に支えられながら——遂行される行為の諸過程の意味論理的な首尾一貫性である。目的の観念は、行為の諸条件を分析的に認識する場合の観点となるとともに、(当該専門領域の概念体系に基づいて、当該行為によって追求されるべきことが主張されている)一定の価値の観念を表示している。この種の行為の諸過程は、一貫して追求されるべき明確に意識された目的と、それ

に至るまでの手段として位置づけられた一連の行動諸過程から構成されている。そこには、今さら言うまでもないことながら、明確な目的意識とそれに基づく体系性がある。そこで、次に問われるのは、それでは、前反省的・前意識的な種類の行動や精神生活の諸過程にはまとまりや方向性が存在しているのだろうか、ということである。われわれは、この問いに対して勿論肯定的に答える。そして、われわれの関心は、前反省的な諸活動にその種の一定のまとまりや方向性を与えているもの、換言すれば、前反省的な諸活動が帯びているその種のまとまりや方向性の——反省的探究や目的意識的行為に見出されるものとは根本的に異なった——特徴的なメカニズムを問うことにある。そこで、まず、本項において、前意識的な行動や精神生活の諸過程には、それぞれ——反省的・意識的に構成されて保持されるような様式のものとは異なった——或る一定の種類のみまとまりや方向性が存在し、その働きが限なく広く浸透していることを、主として事例に即して指摘する。そして、その種のまとまりや方向性のあり方、メカニズムに一般的に見出される特徴的な諸傾向については、さらに次項で具体的に考察する。

われわれの生活の通常の過程には、外界の刺激に直接、まったく不用意にさらされて、瞬間的に——そしてその限りにおいてその前後の諸々の行動や精神生活の脈絡とは何の関連もなく——反応してしまうという場合がないわけではない。熱いものに手を触れて引っ込める、街角を曲がった途端にまばゆい自動車のライトに眼がくらんで、瞳孔を収縮させる、突然の大きな物音に身が縮んだり跳び上がったりする、等々。その際には、われわれの反応は、脈絡も方向性もたない、その場限りのものである、というより、その場合の反応は、われわれ自身が為したものであるという性格さえ帯びてはいない。だがしかし、この種の、殆ど純粹に生理学的ないし生物学的な種類の反射反応には、日常普段の生活の過程において、われわれはむしろ極めて稀にしか出くわさない。

生理学的・生物学的な水準の反射的反應を超え出た、日常普段の通常の行動場面においては、不可抗力を以て強制された特殊条件の下に或る場合を除けば、人は、自らが為した行動——それを為した仕方・過程とその諸結果——について、それが如何なる種類や形態のものであれ、まさにそれを為した者、それが帰属する人格として、いつでもその責任を問われる可能性がある。われわれはそのような立場に置かれているのであって、「ついうっかりして」、「別のことに気をとられていて」、「事情がそうであるとは知らないで」等々という、その行動についての私の弁解は、当該行動を私の「日頃の行い」と関連させてその意味を理解し納得しようとする人々の対応の仕方を、いささかも揺るがすことはできない。そして、私もまた、同じその種の仕方でもって人々に対応し、彼等の行動に接している。われわれは、幼児、それどころか誕生後間もない嬰兒の個々の動作や表情に対してさえ、それと基本的に同じ仕方・態度を以て接している。赤ん坊の或る反応や所作に対して、われわれはそれが彼（女）の或る種の意図に出たものであると看做して、その「意図のこもった行為」を眼を細めて喜び楽しむ。われわれは、われ識らずそうしているし、そうしてしまう。個々の特殊な動作や態度・表情等はひと続きの或る行動の一構成部分であって、まさにその行動の脈絡のうちでそれぞれ特定のまとまりと方向性、換言すれば意図ないし意味を帯びて為されており、さらにそれを包含している行動の脈絡はまた当該行動主体の営む一定の生活活動の連続的過程の一部を成して、その一層広大な意味の脈絡からそれ自体の特殊な意図ないし意味を分与されて担っている——というのが、われわれ皆の揺るぎない確信、改めて反省的にその根拠を問うまでもない、暗黙且つ自明の確信なのである。その種の暗黙の確信、他者の振舞に対してわれわれが為すその種の対応の暗黙の仕方・

態度の根深さとその一貫性——または浸透性と偏在性——は、むしろ、それとは逆の対応の仕方・態度がとられるとしたら事態は一体どうなってしまうかということ仮に想定してみれば、一層明らかになる。例えば、他者の或る行動や態度・表情が——その前後のものと同様に——如何なる種類の脈絡（関連または連続）にも位置していない、まったくその場限りのものである（したがって、当然のことながら如何なる意図や意味も帯びていない）と私が看做すとしたら、その時には、私は彼（女）を一体如何なる種類の存在として処遇していることになるであろうか。

さて、そこで、前反省的・前意識的な行動ないし精神生活の諸過程が、まとまりも方向性も何らもない、単に断片的な反射反応の継起と並列から成るようなものでは決してないし、また他方において、それは後になって人が改めて反省的に意図して構成した体系的な意味の脈絡に専ら意識的に依拠することによって成り立っているようなものでもないとするれば、この種の前反省的な行動や精神生活の諸過程に固有の——反省的に構成され、目的意識的に追求される特殊に一面的な意味の脈絡に基づくそれとは種類の異なった——まとまりや方向性の存在と働きとが、より一層積極的な形態で指摘され提示されなければならない。われわれは、前反省的・前意識的な行動や精神生活の諸過程の固有の、その種のまとまりや方向性の具体的なあり方や作用を、次のような三段階に分けて考察してみよう。即ち、その第一は、日常普段の生活場面において観察される、（前反省的な諸過程の）その種のまとまりと方向性を具体的に指摘することであり、第二は、反省的意識の働きが始まる——生み出される——場合の諸過程を具体的に辿って観察してみることであり、第三は、そもそも反省的意識の働きに意味を与えているものが実は前反省的・前意識的な生活過程であって、この後者こそわれわれの生活の目的であり、その価値の源泉を成すものであるということ指摘すること、である。

第一のテーマは、前反省的な行動や精神生活の諸過程が帯びている固有のまとまりや方向性は、われわれの日常普段の生活場面では如何なる具体的な形態のものとして観察され得るか、その諸形態を指摘することである。そして、それについて考察を深めるためには、われわれは、日常生活の主要な舞台となっている諸場面、くつろいだ家族生活の諸過程、近隣とのつき合い、友人との普段のやりとり、職場の人間関係、遊びや趣味の楽しみの場面等を広く念頭において展望しつつ、それらの諸場面においてわれわれの行動や精神生活の諸過程を支えて、それらに一定の枠組を与えているところのものへと、思慮深い注意を向けなければならない。しかし、それらに枠組を与えているものは、改めて問うまでもない自明のものとして私の心身が余りにも深く馴染んでしまっているために、通常の場面では容易には反省的な意識の光の下にもたらずることができない。それ故に、むしろその種のものの働きが阻害された場面、例えば異文化の生活条件の下で自ら体験した緊張や衝撃等について、その意味内容を詳細に検討したり、反省的意識の一貫した働きがまだ十分には発達していない幼児の行動・態度に注目し、そのまとまりのあり方を観察して、類似の場面におけるわれわれの行動・態度と比較するなど、多様な工夫が必要となる。また、文化人類学、民族学、歴史学、言語学等の知見も、われわれ自身の生活様式とは異質な生活や行動のあり方を提示して、われわれの日常普段の前意識的な諸活動の特徴を成す枠組を、逆向きに背後から浮かび上がらせてくれる。

さて、われわれは、生活の通常の諸過程を、その雰囲気をつくろいで味わいながらも、自信に充ちた確固たる仕方、それをいつも通りに執り行うことに何らの不安をも感じることなしに、自明のこととして過ごしている。そこでの相互のコミュニケーションや共通理解の成立に



は基本的に何らの不安もないし、集団的な人間関係や集団生活も安定して展開されている。われわれは、これから始まる今日一日の自分の生活の展開の流れを——手帳に控えたスケジュールとはまた別に、あるいはその種のスケジュールをも包括して——全体としていわば予感や見通しをもって感受しているし、それについて「期待に胸をふくらませ」たり「不安が脳裏を過る」のを覚えたりする。そこで私がどんな人々と出会うかはおおよそわかっているし、或る友人と出会えばどんな調子のやりとりが始まることになるかは「言わずと知れた」ことである。さまざまな事態やできごとにてくわすことであろうが、結局それらは私の掌握下にある資源や手段、それにいつも通りのやり方をまったくはみ出してしまうものではないだろうし、さしたる「問題はあまい」、等々。

家庭におけるわれわれの振舞は、まったく自然に為される。「勝手に知った」心身が自ずと働くわけである。家庭での振舞は、まったく自然に為されるのでなければならない。「足を投げ出してはばからない安心が、家庭の前提条件であり」、(乳児院や養護施設とは異なった)「普通の家だということの意味」(伊藤友宣、『親とはにか』, 中公新書, 1972, P. 38.)である。ところで、われわれの心身が直接自然に、つまり改めて反省的にそれを意図せずとも、それぞれの状況に適合的に調整された仕方働くのは、心身が大別して二つの種類の活動の機制をわがものとしてそれに習熟しているからである。その一つは、心身、身体=精神を直接、個人的に活動させる習慣的な様式としての諸機制であり、もう一つは、コミュニケーションを初めとする、協同的行動に関わる標準化された生活態度、即ちそれぞれの集団生活に固有の背後期待の働きである。心身を直接、個人的に、最も手近な道具として行使する、習慣的な行動様式として、日常生活の諸過程の最も基礎的な単位を成しているところの無数の、多様な行動のまとまりを指摘することができる。箸や鉛筆の握り方、ナイフの扱い方や紐の結び方や歯ブラシの使い方、直立の姿勢や座り方、歩き方、ボールの投げ方やキャッチの仕方、ことばの発音の仕方や文字の書き方、等々——これらはいずれも、最近の子どもたちにその未発達や歪んだ定着の仕方が指摘されているところの、最も基礎的な生活習慣の一部である。同じ種類のものでも、さらに無数の習慣群を組み合わせた複雑高度なメカニズムを含んでいるものとして、針や鋏や編み棒の使い方、包丁を初めとする料理道具の扱い方、金槌な鋸やねじまわしを扱う「こつ」、自転車の操作や自動車の運転技術、ステッキや松葉杖や車椅子の使い方、タイプライティングやコンピュータのキーボード操作、書道における運筆や絵筆の技法、ピアノやヴァイオリンの演奏技術、等々のいわゆる「身体図式」Körperschema, schéma corporel (M. Merleau-Ponty) や「暗黙知」tacit knowledge (M. Polanyi) を挙げることができる。これらの身体図式や暗黙知こそ、日常のわれわれの行動の諸過程を構成しているところの、最小のまとまり、基礎的な単位となるものである。(M. ポラニー、佐藤敬三訳『暗黙知の次元——言語から非言語へ』, 紀伊国屋書店, 1980, pp. 13-47. Maurice Merleau-Ponty, *La Phenomenologie de Perception*, Gallimard, 1945, pp. 114-124, 166-172, 竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学』, 1. みすず書房, 1967, pp. 172-185, 239-246. J. Dewey, *HUMAN NATURE AND CONDUCT*, 1922, *The Middle Works*, Vol. 14, p. 51. 東宮隆訳『人間性と行為』, 春秋社, 1960, pp. 58-59.)

さて、家庭の日常普段の生活過程を構成している、もう一つの種類の心身の活動上の機制が、協同的行動に関わる標準化された生活態度として、家族の皆に暗黙のうちに共有されている、——ガーフィンケルがそのいわゆる「違背実験」breach experiment において露呈させてみせたような——多様な背後期待の作用である。家庭で交わされる言葉は、その種の濃密に敷きつ

められた背後期待の一定の文脈を指し示すところの「指標」index であり、家族の一員でなければその微妙で詳細な意味内容は理解することができない。家庭の言葉の著しい特徴を成す、この種の「文脈依存性」indexicality に注目して、それを、子どもが就学して後に習得しなければならない、文脈から基本的に自由な標準的な言語の用法と区別・対比して、それぞれ「一次のことば」と「二次のことば」とに呼び分ける試みがある（岡本夏木、『言葉と発達』、岩波新書、1985.）。今では随分希薄になったとはいえ、それでも家族あるいは家庭生活が抜群の人格形成上の働きを潜ませているのは、まさにこのような人間関係や振舞の自然さ、表裏のなさ、うちとけてくつろいだり方と、暗黙の仕方でそれらに枠組を与えて規制している、濃密に織り上げられた背後期待の働きの故である。そこでは、意識的な防衛規制や「心の鎧」が解き放たれ、心底から精神生活が共有され、感情が通い合うことができる。子が「親に似る」のは、子どもの精神生活に直接触れてそれを形成するものが、こと改まって——背後の文脈から遊離して——為されるお説教ではなくて、むしろ親の、自らは意識していない普段の自然な生活態度や振舞そのものだからである。音楽家の家庭で育つ子どもは、音楽に興味をもつであろうし、また音楽に関して一定の能力を獲得するのでなければ、彼（女）はその家庭の一員として、生活の普段の過程に加わることができないであろう。ところで、家族の振舞を枠づける固有の背後期待の脈絡は、近隣社会、さらには全体社会の共有している、一定の自明で暗黙の信念や価値観に支持されて、それと連動して働く時に、初めてその本来の威力を発揮する。「核家族」の孤立した個室の中で、主として母親によって、意識的に構成されて行使される言葉を以て為されるような「しつけ」は、それ自体殆ど一個の病理である。「しつけは、親子関係だけに封じ込められるのではなく、『子どもは世間が育てるもの』という伝統に立ち返り、子どもの存在を社会全体のものとして再確認し、社会のなかのしつけを指向してゆくことが今日あらためて要請されている」（今津孝次郎、浜口恵俊、作田啓一、「社会環境の変容と子どもの発達——大人と子どもの関係を中心として——」、『子どもの発達と教育1、子どもの発達と現代社会』、岩波書店、1979、p. 60.）。われわれは、さらに、家庭生活にまとまりを与えてそれを方向づける、この種の、各家族に固有の暗黙の特殊な生活態度について、言わばその構成要素ないし基礎的単位を成すものとして、それぞれ特有の言葉遣い、生活上の行儀作法、関心や好みの特殊なあり方、基本的な価値判断の基準を挙げることができる。（J. Dewey, DEMOCRACY AND EDUCATION, 1916, The Middle Works, Vol. 9, Southern Illinois U. P., pp. 21-22. 松野安男訳『民主主義と教育』、岩波文庫、1975、上、pp. 37-38.）

感情を互いに通わせ合うことのできるような種類の近隣の付き合いや友人とのやりとり、さらには職場のいわゆる「インフォーマルな」人間関係や、遊びや趣味の付き合いにおいても、それぞれの場合の人間関係の種類とその親密さの程度に応じて、その意味内容と疎密の程度とに種々の差異はあれ、家庭生活におけると同様の、成員に共有された、標準化された一定特殊の生活態度、いわゆる背後期待の現前、その存在と働きを指摘することができる。ここでもまた、最も肝心なのは、その振舞の自然さや滑らかさである。そして、ここでもそれぞれの集団は成員たちの心に「われわれ感情」we-feeling を発達させることができるし、それ故にまた形成力をもつ。彼等の行動や言葉は自ら暗黙の仕方で理解された意味内容を帯びており、一定の枠組と方向をもって調節されており、焦点ないし頂点を成す部分とそれを際立たせるべく働く背景の部分へと分節されている。これらの人間関係においてもまた、人々の振舞は、自明の仕方で解読されるべき一定の意味文脈を担った、「指標的表現」indexical expression としての性

格を色濃く帯びている。

日常普通の生活において、われわれは「天動説」——「日はまた昇る」——の世界に生きているし、「平ら」な地面を脚で踏まえている。われわれが棲んでいる世界は、自分の家を中心として、私的な人間関係の網目を伝って広がる、それぞれ独自の生活地図の世界であって、その点では子どもの場合とちっとも変わらない。子どもと変わらないのはそれだけではない。われわれが日常生活をそれに頼って過ごしているところの「实际的（常識的）知識」 practical or commonsense knowledge は、個人的あるいは私的な人間関係と密接に結びつけられて、その関係が帯びている特殊な情調に彩られており、したがってそれは——冷淡で、無味乾燥な客観的知識というよりは——私的な諸々の感情や好みや関心等に包まれた、独自のまとまりと構成と傾向性とを有する知識の体系である。(Alfred Schutz, COLLECTED PAPERS 2. STUDIES IN SOCIAL THEORY, Martinus Nijhoff, 1964, pp. 93-95, 森川真規雄・浜日出夫訳『現象学的社会学』, 紀伊国屋書店, 1980, pp. 33-34. John Dewey, Theory of Course of Study, in Paul Monroe ed., A CYCLOPEDIA OF EDUCATION, The Macmillan Co., 1925.)

そして、その種の実地的知識、「手もちの知識」 stock of knowledge を、われわれはただ自分一人で構成し構築するわけではない。それを構築するに当って、われわれは、周囲の集団や社会に通用している伝統的な信念や「ものの見方・考え方」——フォークウェイズ、モーレス、法、習慣、風習、礼儀作法、流行等 (A. Schutz) ——に勿論のこととして依拠し、それらを安心してわがものとする。例えば、現在われわれの日常生活におけるものの見方・考え方を枠づけているところの、社会的に一般的な伝統的な信念を具体的に指摘するとすれば、それには次のようなものがある。登校拒否または不登校の条件や要因をめぐる賑やかな議論に対して、そもそも「登校」することを疑問の余地なく自明の「義務」として、不登校の当事者をも含めて、人々をそれへと動機づけているところのものを問おうとする考えがある。まさにそのことの自明性の故に、登校し得ない子どもが自ら罪悪感に苦しむわけである。(例えば、三好邦雄、『学校が恐い——登校拒否と離母期教育』, 朝日出版社, 1984.) 「受験戦争」の過熱を憂える、お「説教」調の大方の論説に対しては、われわれ皆が——その「戦争」の渦中で傷ついている当の受験生をも含めて——例外なく、まさにそのように熱中してそれに「参戦」せざるを得ないように、われ識らず動機づけられているところの、われわれの社会に固有の「能力」観や「人間」観、さらにはその種の特殊日本的な「能力」観を生み出して支えている企業集団の伝統的な経営秩序、いわゆる「経営家族（おイエ）主義」の一層の浸透・展開を、説得的に分析して提示する研究がある（例えば、岩田竜子、『学歴主義の発展構造』, 日本評論者, 1981. 西尾幹二、『日本の教育 ドイツの教育』, 新潮選書, 1982. 三戸公、『『家の論理』と日本社会』(1)~(8), 『書齋の窓』, 1992.1.~10月号, 有斐閣, 所収)。子どもの発達における歪みや病理を指摘して、それへの一層綿密な対処を督促しその技法を教示しようとする、一般的な論調とそれを喜んで迎え、それに頼ろうとするわれわれの意識態度に対しては、その種の正統派の公式的な「発達」観そのものの歪み、即ち、「一丁前」の「労働力」や「人材」として子どもが育つ青年期までしか視野に入れていない、その種の「発達」概念の、専ら経済的効率本位に規定された意味内容の片寄りを指摘して、その再構成を試みたり、「生涯発達」の観点を強調する、新たな立場が最近展開されてきている。(例えば、安達喜美子、『第7章 『発達』概念の検討』, 東洋監修, 波多野誼余夫編集『教育心理学講座4 発達』, 朝倉書店, 1982., 所収。山下恒男、『反発達論——抑圧の人間学からの解放』, 現代書館, 1977. R. M. ラーナー・N. A. ブッシュ＝ロスナー＝ガル編,

上田礼子訳『生涯発達学——人生のプロデューサーとしての個人』, 岩崎学術出版社1990, 高橋恵子・波多野諄余夫, 『生涯発達の心理学』, 岩波新書, 1990.)。教師と子どもの間の全人格的な, 言わば「実存的」な心と心の通い合いを素朴に信ずる, われわれのロマンティズムに対して, 「初等普通教育」が現実には担っている職分, 即ち「時間厳守」と「服従」と「機械的な反復作業に慣れること」への訓練というその職分を指摘して, 社会的な教育機関におけるそれぞれ公的な「身分」としての「教員」と「児童・生徒」との間に, 個人的または私的な親密な交わりの成り立ち難さを冷静に指摘する見解がある。学校の「門」の内側には, もはや「私」と「子どもたち」は存在していないし, 私と彼等の分け隔てのない心底からの心の通い合いというようなことは, 私の単なる願望と空想の産物に過ぎなかったのであろうか。(例えば, A. Toffler, THE THIRD WAVE, W. Morrow & Co., 1980., p. 29. 徳山二郎, 鈴木健次, 桜井元雄訳, 『第三の波』, 日本放送出版協会, 1980., p. 48. 堀内孜, 「学校の社会・歴史構造からする存在理由」および水本徳明, 「学校の間人形成構造からする存在理由」, 吉本二郎・朴聖雨『講座学校学1 学校』, 第一法規, 1988, 所収。柳治男, 『学校のアナトミア——ウェーバーをとおしてみた学校の実像——』, 東信堂, 1991.)。以上, われわれの常識的なものの見方・考え方を現在枠づけているところの, 社会的に一般的な伝統的な信念のいくつかを, 特に教育問題に関わりのある生活領域から拾い出して, 事例として指摘してみた。これらの諸信念もまた, 既に指摘した諸々の装置やメカニズムと並んで, われわれの日常普段の「生活世界」life-worldを「自明とされた物事の領域」the zone of things taken for granted (A. Schutz) として構成することに大いに寄与しているものなのである。

先に, われわれが掲げた, 本項の第二のテーマは, 反省的意識の働きが始まる——生み出される——場合の, 具体的な諸過程を明らかにすること, である。われわれは, 前項, 「1.) 反省的意識の働きに先行するもの——日常生活過程における諸活動の前反省的・前意識の性格——」において, 反省的意識の働きが最も典型的に発展させられた場合の事例として, 特殊専門的な科学的探究活動を指摘して, その種の探究活動に一般的に見られる具体的な操作手続きを辿り, その諸特徴を考察したが, その際, われわれは, この第二のテーマ, 即ち反省的意識の働きがどのような諸過程を経て始められるのかという問題に触れることなく, 後に取り上げるべき問題として, 敢えて看過してきた。そこでは, 当該探究活動は既に問題的状况に直面していて, それに対して——当該専門領域に固有の事態認識上の観点とその専門的な概念体系とを背景としつつ——事実やデータの確定と仮説的観念の構成の操作手続きに着手しているという段階から, 記述が始められていた。つまり, 探究活動は既に始まっているということが, そこでは前提されていたわけである。したがって, そこでは, 探究活動——換言すれば, 反省的意識の働き——はどのような諸過程を経て始められるに至るのかという問題が, 主観的に焦点化されずに残されていたことになる。今やこの問題に取り組むべき時である。

「意識は躊躇ないしは選択を意味する」ものであって, それは「表象と行動との間のへだたりの尺度である」(H. Bergson, L'evolution creatrice, OEuvres, edition du centenaire, p. 602, 真方敬道訳『創造的進化』, 岩波文庫, 上, pp. 182-183.)。だから, 探究活動が始められるのは, 活動が問題的状况に直面しているからである。問うこと, 疑問に思うことと調べ探究することとは連続していて, 或る意味では同義である。問題状况に直面するというのは, 自分が活動している状況が, 「問題」としての性格や傾向を帯びていることに気づくこと, 状況のそのあり方

を「変だ」、「おかしい」と感じることである。そして、自分の活動の状況を「変だ」、「おかしい」と感受することは、さらにいえば、これまで自分がその状況に感取していた情調や性質 quality or quale に変化が生じたこと、その情調や質がこれまで通りのものではなくてしまったことを意味している。かくして、活動の状況における「問題」の感受は、一定の緊張と不安を伴っている。状況が不確かで、未確定で、動揺しているわけである。勿論、活動の状況の「問題」化の場面に際して、われわれが感受するのは——どんな「問題」的状況の下でも同一のものとして現れるような——ただ単なる、一般的なものとしての「問題」や「異常」や「不安」というようなものでは決してない。個々の活動状況の「問題」化に際して、われわれは（相互に異なる）独自の特殊な質や情調を帯びた「問題」や「不安」をそれぞれ感じとるのであって、個々の状況が孕んでいる「問題」のまさにこのような独自の特殊な性質や情調、「問題」の固有のあり方こそが、それぞれの問題的状況におけるその後の探究活動の展開の過程を固有の仕方方向づける。それぞれの問題的状況を特殊に彩るところの、問題的事態の独自の性質や情調が、その後に着手され展開される探究活動の問題関心や目的の具体的形成の過程に入り込み、その形成を主として導くものとなるからである。

ところで、自分の活動の今日下の状況を「変だ」、「おかしい」と感じるのは、上述した如く、今までの状況または状況の今までの情調や性質からの変化・異変として感受することである。今まで通りのそれではない、というわけである。そして、当然のことながら、それと同時に今まで通りの自分の（その当の）状況への関わり方も「問題」と感じられ、躊躇・逡巡を覚える。「問題的」状況が一定の不安や緊張を伴うのも、それ故当然である。そこで、改めて注目されるのは、今まで通りの状況——即ちそこからの変化、その性質や情調における或る種の変化をまさに変化として、不安や緊張を伴って特に感知せざるを得なかったところの、今まで通りの状況——のあり方である。われわれは、「変だ」、「おかしい」、「これまでとは違っている」と感じて、新たな状況のあり方をこれまでのそれとともに意識するに至るのであるが、かくして活動の状況の特殊な推移に気づき、それを意識するようになる以前にも、われわれはまったく心身の無活動の状態にあった、例えば眠っていたわけでは決してない。自分の置かれている事態について特に明白に気づいていない状態、それは——通常の自らの経験を少しでも振り返ってみれば分かる通り——何ら心身を働かせていない時のわれわれの状態ではない。問題的状态は無（活動）からは生まれ出ない。それは先行している活動の状況の変化したものとしてのみ、われわれにたち現れる。だから、それに先行する状況においては、われわれは勿論活動しており、心身を働かせて何事かに従事している。むしろ、ここで肝心なことは、この先行する活動の特殊なあり方、その特性でありメカニズムである。この活動状況を最も根本的に特徴づけるメカニズムは、ここまでの記述によって既に示唆されているように、或る活動に携わり、それに没頭しつつ、当の活動主体がその活動の状況について明白には——つまり、状況を構成している諸要素・諸条件を一定程度広い範囲においては——気づいて（意識して）いないという、そのあり方である。ここでは、人は、その活動の渦中であって、ほんの目先のすぐ次にくることに専ら心を奪われてしまっていて、自分の為していることを忘れていて。彼はいわば「うっかり」していて、「心ここにあらざる」心境なのである。この種の活動を彼において——その潜在意識的または前意識的な意識体制にもかかわらず——それなりに系統的に一貫して調整し成り立たせているのは、彼の心身にその生活史を通して沈殿し、習慣として蓄積され組織されているところの「実際の（常識的）知識」である。心身に蓄積されて、その直接的な働

きとして発揮される、この種の実際的知識の作用の圏内は、彼にとっては「物事が自明とされる領域」である。「物事の自明とされる領域」とは、「たとえわれわれがその構造についての明晰判明な認識や理解をもっていなくとも、われわれが特定の時点でかかわっている理論的、実際的な問題に関する限り、特別な検討を必要とするようにはみえない世界の一分節である。」

(A. Schutz, COLLECTED PAPERS 2, pp. 123-124, 森川・浜訳『現象学的社会学』, p. 78.)  
 そこでは、状況は、心身の「手もちの経験や知識」、実際的知識によって生活史的に定義されている。だから、状況は、疑問の余地なく画定された周知の事物のみによって構成された（活動の）枠組または領域として、心身に直接知悉されるものとなるが、そのみならず、またこの種の状況の定義は、活動が向かうべき「目下の目的」prupose at handを含んでいて、この目的の下に手もちの知識が多様な「有意性」relevanceの層に分けられて再編され、それに応じて状況の特定の諸要素がその有意性の程度に応じて選定され秩序立てられる。自明とされた物事の領域、通常の生活世界は、何よりもまずわれわれの活動の場であって、そこではわれわれは実践的な関心を以て既に活動している。そこでは、われわれは、他の人々とともに追及している目的を実現するために、状況に関わらなければならず、またそれに対して働きかけなければならないのである。そこでは、かくして、われわれの心身が直接に——即ち、反省的意識の改めでの働きの媒介なしに——状況の構造を把握しつつ、そのまま直ちにそれに対して働きかけているわけであるが、われわれが活動の状況の特殊な情調・性質の根本的な変化に気づいて、自らを見出すに至るのは、その変化に先行する、まさにこのようなメカニズムを帯びた活動との対比や関連においてである。

さて、活動主体は状況の（情調や性質における）根本的な或る種の変化・異変、即ち問題の存在に気づいて、「われに返る」。目前の直接的なものごとへの没頭を中断して、われわれは、活動の状況のあり方、諸要素・条件に広く注意を向けようとする。この場合、肝心なものは、問題なものとして感受されるに至った状況の或る種の特性、状況の未確定性の或る特殊なあり方である。何故なら、それこそが——この場合に固有の仕方でも——われわれを緊張させ不安に感じさせているところのものであり、目覚めた意識の働きを捉えて、その注意や関心を状況の構成要素のうちでも特に或る範囲、或る種の傾向のものへと方向づける、当のものであるからである。そして、状況が孕む、この特殊な性質を帯びた問題、特殊な意味における未確定性を、当該状況のうちで確定されている諸要素・条件——「事実」や「データ」——を以て規定し説明すること（「仮説的観念」の構成）が、問題感受の後に展開される探究活動の特殊な問題関心となり目的となる。状況のうちで活動主体が感受する、問題の特殊な性質または特殊なあり方が、かくして、探究活動の観点を特殊に一面的に限定して構成する過程を導き、その後の諸段階の操作を一貫して規定することになる。

反省的意識の働きが、それに先行して既に展開されている、自明とされた「手もちの知識」に基づく心身の直接的な活動のうちから、その（活動の）状況に感知された特殊な異変の意味内容を分析的に解明する過程として——当該活動を中断して——開始されるという、このメカニズムは、日常普段の生活過程における常識的知識の水準での意識的な反省の場合でも、特殊に専門化されて体系的・組織的に遂行される社会的諸活動の或る手順に関する意識的な再検討の場合でも、また専門科学的な探究活動において自明で周知のものとして依拠してきた、基礎的諸概念の意味内容の理解やその（概念）操作の仕方、さらには探究活動の或る操作手続き等に関して疑念を抱き、それら自体が改めて主題的に探究され始めるという場合でも、基本的

に異なるところはない。反省的意識の働きは、それらのいずれの水準における場合でも、それに先行する前意識的な心身の直接的活動の諸過程を持っている。この前意識的な諸過程は、それらを内的に相互に調整し体系化するための、いわばそれらに固有の装置や機能を含んで展開している。その種のまとまりないし内的な秩序と方向性は、活動主体によって前意識的・前反省的に一定特殊な性質や情調として直接感受されている。そして、感受されているこの種の性質や情調が、或る一定の条件の下で状況の異変の感じとなり、その後には始まる反省的意識の問題の状況の探究の働きにおける関心の核心となる。

われわれは、さらに進んで、反省的意識の働きにそもそも意味を与えているものが実は前反省的・前意識的な心身の働きとしての生活過程なのではないか、そして、この後者こそがわれわれの生活の目的、価値の源泉を成すものなのではないか、と考える。これが、先に掲げた本項の第三のテーマである。われわれの生活の過程における反省的意識の働きの、いわば第二次的・派生的な地位と性格、前意識的な行動や精神生活の過程の第一次的・根源的な地位と性格を指摘し確認することが、ここでの問題なのである。

これまでの叙述において繰り返し指摘してきた通り、反省的意識の働きを——それが、日常生活の通常の行動や精神生活の過程の再編として働く場合であれ、専門的に特殊化された組織的・制度的な公的諸活動の遂行において、一般的な行為の原理や規則を現実の特殊な場面に適用する際の判断や調整作用として働く場合であれ、また専門科学的な探究活動として現れる場合であれ——首尾一貫して調整しつつ統御するものは、一面的に特殊化されたその問題関心であり目的意識である。今日下のわれわれの考察のテーマは、したがって、この種の問題関心または目的意識が反省的意識の働きそのもののうちにその起源をもち、専ら反省的意識の働きそれ自らによって作り出されたものであるのか、否かという形式をとって表現され得ることになる。これまでの本稿の考察の文脈においては、われわれはこの問いに否という回答を示唆してきた。反省的意識の働きに先んじて、或る特殊な性質・情調を帯びた、前反省的・前意識的な活動諸過程が既に営まれており、前者はまさにこの活動の途上で、その脈絡に基づいて喚び起される——先行する、その活動の「問題」化、しかも、或る特殊な性質や意味を含んだ「問題」化の脈絡のうちで、その「問題」の解明に向かって方向づけられた探究の過程として、喚び起される。かくして始められる探究活動は、一方において、この特殊な「問題」の意識に基づいて、自らの専門領域の諸概念・知識の体系を、この場合の有意性の程度に応じて焦点化して再編しつつ、他方では、この専門的な諸概念・知識の体系を用いて、かの「問題」の意識を一面的に規定されたこの場合の特殊専門的な問題関心として構成する。そして、この特殊専門的な問題関心とその後の探究活動の諸段階の操作を一貫して調整し統御することになる。「われわれが自己の位置を見出さねばならないのは、この自明とされた物事の領域においてである。未知のものに対するわれわれの探究は、すべてこうした「既知」とされる事柄の世界の内を生じ、また、その存在を前提としている。」(A. Schutz, COLLECTED PAPERS II, pp. 123-124.)

反省的意識の働きの第二次的・派生的な地位と性格をさらに具体的な形で示しているのは、専門科学的な探究において操作される諸「対象」——「事実」・「データ」や「仮說的観念」——の、その意味内容において厳密に一面的に限定されたもの、体系的思考の一貫した選択・加工・構成の操作の産物としての抽象的な性格である。諸対象に見出されるこの種の一面的に抽象的な性格は、当然のことながら、検証された仮說的観念の体系としての専門諸科学の概念(知識)

体系、いわゆる科学諸理論においても一貫している。この点については既に指摘したところである。専門諸科学における探究活動の諸段階の手続きや操作が、厳密にその意味内容を規定された一定特殊な問題関心（観点）の下に一貫して統制されていること、そこで操作される諸対象が一面的（一義的）な意味だけを担った抽象的なものであることは、勿論、専門科学的探究の強みであり、その方法上の根本的特質を成すものである。そうした方法に基づいて初めて、探究活動によって提案される仮説的命題の検証が一般的に可能となり、当該命題の客観性が保証されることになるからである。だがしかし、一般的に検証可能な、その意味で客観的なこの種の専門諸科学の理論——概念体系——やその構成要素としての基礎的諸概念——諸対象——は、日常生活の状況やできごと・事物の極めて局限された一面、それらのものの或る種の特殊な特性や機能のみに関わるものであり、それら諸特性・機能相互間の諸関係だけを認識し記述したものである。それは、通常的生活過程で経験される状況やできごと・事物を、その多面的で多様な諸性質および諸特性・機能においてまるごとそのまま、全体として認識し表示しているものではない。勿論また、専門科学的な諸概念やそれらの体系は、日常生活の状況やできごと・事物のいわゆる「本質」essenceを捉えて表現しているわけでもない。日常生活の状況やできごと・事物には多様な性質や特性・機能が見出され、それらを経験する仕方・様式も多様で多次元にわたって存在しているのであって、反省的認識、特に専門科学的な探究による認識が——極めて重要な経験の仕方・様式の一つであるとはいえ——その唯一のものでは決してないし、他の仕方・様式をすべて否定して、そのみが当の状況やできごと・事物に接近する唯一の「真」なる方法であると僭称する、いかなる特別の根拠もないからである。そして、反省的認識、特に専門科学的な探究の操作とその産物たる概念体系の、その意味内容において特殊に一面的なあり方・性格がまさにこのように確認されるとすれば、そのことと関連してここで指摘されるべきことが二つある。その一つは、個々の専門科学的探究活動は、ただその——専門的概念体系の——内部で自己完結的・自給自足的に成り立つことができるのでは決してなくて、それが関わる生活上の状況やできごと・事物を自らの特殊に専門的な関心にしがたって操作し統御するために、隣接諸科学のみならず、全ての諸科学の知識の体系、否それどころか日常生活における常識的（実際の）知識を前提として、それらに広く依拠して初めて展開されることのできるものであるということであり、他の一つは、日常生活の状況やできごと・事物の特性・機能の特殊な一面的認識としての或る専門科学的知識（概念）の体系は、他の諸科学の知識体系と適宜に結合させられながら、生活の場面において通常の状況やできごと・事物をより一層意味豊かに、しかも合理的に安定した仕方で経験することに寄与するという点で、その本来の意味をもつものである、ということである。前者の論点については、ここで触れるのが初めてでは勿論ない。日常生活の通常状況やできごと・事物に操作を加えて、その或る特殊な一機能・特性のみを専ら関心や考察の焦点にもたらそうとする場合、それらのものの他の諸側面、即ち他の諸特性・機能——さらにはそれらに関わりある他の状況やできごと・事物——を適切に操作して、当面関心の焦点となっている、かの一側面に攪乱的な影響を及ぼすことのないように厳密に統制しなければならないが、その種の統制条件を維持するために当の状況やできごと・事物（のその他の種類の諸特性・機能）を操作する上で依拠すべき知識や技術は、もともと当該専門領域の知識（概念）体系のうちには存在していないもの、専門外の諸知識・技術ではないであろうか。そして、そのような仕方で依拠しなければならない、専門外の知識・技術は、一体どこまで広がっているのであろうか。この点に関して A.Schutz が例示して



いるのは、社会諸科学の専門的な探究活動がいずれも自明のことがらとして前提している、日常生活の常識的・実的な知識や信念の範囲・広がりである。「あらゆる社会科学は、思考と行為の間主観性を自明なことと考えている。他の人間が存在すること、人が人に対して行為すること、シンボルと記号によるコミュニケーションが可能であること、この生活世界が固有の歴史と時間・空間に対する独自の関係をもつこと、——これらはすべて、あらゆる社会学者が研究を行ううえで、はっきりとであれ暗黙にであれ、基礎となっている考えである。」(COLLECTED PAPERS, I, p. 116., 森川・浜訳『現象学的社会学』, p. 5.) 或る専門領域の探究が隣接諸科学を初めとする諸科学の知見、さらには日常生活の実的な知識を前提とし、それらと相互に作用し合っている、その仕方や形態は、今述べたようなものだけでは勿論ない。さらに、例えば、当該探究活動への期待と動機づけ、新たな問題群の提起、対象の構成におけるモデルの示唆、実験や検証の操作における新たな手段や方法の提供等々を指摘することができる。

次に、後者の論点について。ここで提示された考えの立場は、要するに、——或る専門領域の特殊な探究活動に没頭している、個々の研究者がさしあたり如何に考えるかということは別問題として、全体としての社会生活の規模において当該探究活動を反省的に対象化しつつ展望するならば——当該専門領域の概念(知識)体系は、社会生活の諸過程を構成している他の何ものかに寄与することをめざすものではなくて、ただ単独でそれ自体として存在し発展することにその根本的な意味があるものであると考える立場と、逆のものである。日常生活の諸過程の状況やできごと・事物の、或る特殊な特性や機能の意味の一面的な認識は、(当該の状況やできごと・事物の、その他の諸性質や諸特性・機能の把握や認識と、相互に結びつき支持し合っで)、通常的生活場面におけるその種の状況やできごと・事物の経験——例えば、所有、取扱、享受、鑑賞、賞味等——を一層安定して、意味豊かに成り立たしめることにどれほど貢献できるかという意味文脈を離れて、それ自らを一貫して動機づけるような根本的な意味を見出し得るとは思われない。勿論、われわれのこの種の立場・考え方は、それ自ら論争の渦中にある。生活(経験)の全体としての豊かさ——それがこの場合の究極の価値判断の基準であるのに——というような観念は、それ自体があいまいであって議論の渦中から抜け出ることができそうにないし、この種の主張は場合によっては科学的研究活動を特殊な政治過程に従属させることにもなりかねない。しかし、その立場の問題性や論争的性格を全面的に認めつつ、なおもわれわれは問わざるを得ない——不変の「本質」の認識とか「知のための知」の理念等がもはや支持され得なくなった、現在においては、この種の、すべての人々にとっての生活(経験)の全体としての豊かさの実現という考えの立場以外に、科学的研究活動を意味づけるものが存在しているであろうか、と。生活(経験)の諸過程の全体としての意味の充実に向かって反省的な諸活動は方向づけられている、と考えるわれわれの立場は、既に指摘した、特殊に専門化された制度的・組織的な社会諸活動——政策や法律の立案や執行・運営、企業経営、医療、軍事的な戦略的行動、教義に基づく宗派的宗教活動、制度的な教育実践等——における反省的な判断の働きを根拠づけ意味づけるものを考察するならば、より一層具体化された仕方理解することができよう。その種の社会的諸活動の組織や制度とそこに体现されている特殊専門的な意味(知識)体系の自己完結的な閉鎖性や自己目的的な増殖・肥大化は、古来種々の格言を以て指摘されているように、一個の社会生活の病理である。自己目的的な政治運動、「法のための法」の運用、行政の「官僚主義」、資本の人格化、自己目的化した教義の固守に伴う宗教的非寛容とその不毛性、伝統的知識伝達のゲームと化した学校教育、「見せ物」化したプロ・スポーツ、

観光産業に躍らされて年中行事と化したレジャー、医療の専門的細分化と専門的医療技術の自己目的化、軍拡競争と軍事技術の際限のない肥大化、等々。われわれの生活にはびこるこれらの病理を抑制し統御することをめざす、われわれの運動の根本的な根拠となることのできるもの、それは、すべての人々にとっての生活（経験）の全体としての意味の充実の実現——ということ以外にはあり得ない。そして、この究極的な価値観念のさしあたりのあいまいさ、捉え難さは、すべての人々がますます多く参加していく議論の過程で、その意味内容を次第に確定していくより他はない。（J. Dewey, EXPERIENCE AND NATURE, The Later Works, Vol. 1, pp. 307-308.）

さて、本項において最後に残された問題は、もしも反省的意識の諸々の働きに基本的な意味を付与し、それらの働きを支える諸価値の源泉となるものとして、日常生活の諸過程それ自体、全体としての日常生活の諸過程を考へることができるとして、さらにその背後にそれを意味づけるような、より一層広大な意味の脈絡は存在していないのであろうか、という問いである。日常普段の社会生活の諸過程は、体系的な反省的意識の働き——特殊に専門化された社会的諸活動や専門科学的な探究活動——を、それらの母胎となって、自らの内部から派生させ展開させるとともに、それらの活動の諸成果を吸収・統合して、自らを再構成しつつ、さらに新たな問題を生み出して、それに再び反省的な専門的諸活動を引き込んで動機づけるところのものであるが、この日常普段の社会生活の諸過程は、まさにこのような根源的な意味づけの働きを、さらに背後の、さらに高次の何ものかから借り受けてくるのであろうか。われわれの日常普段の生活世界に究極・不変の根拠と意味とを与えてくれるような、「实在」や「実体」の世界を探究するものとしての、いわゆる「背後世界」の構想は、古来哲学的思索において主要なテーマを成す試みであったが、今では、特殊な哲学体系に専ら没入するのならいざ知らず、その種の古典的な意味における形而上学の試みは、哲学の主要な議論の枠組からは脱落してしまっている。今では、この種の背後の實在に基づく日常生活世界の究極的意味づけの試みは、専ら宗教的信仰の問題と結びつけられて論じられるものとなっている。そして、宗教的信仰の世界にも、いわゆる「脱神祕化」Entmythologisierungの動向が浸透してきている。われわれは、日常生活世界をそのさらに背後から位置づけ意味づけるような、より一層根源的で包括的な意味文脈を含んだ別世界というようなものをもはや有してはいない、というべきである。日常普段の社会生活の前反省的・前意識的な諸過程こそが、そのまま、すべての種類の目的意識的な活動やそれに伴う反省的な意味理解の試みを胚胎し、展開し、包括・統合するところの、われわれの生活や経験にとっての地平、われわれが依拠すべき最後の、しかも最も具体的且つ現実的な枠組——即ち、「世界」そのもの——なのである。日常普段の生活の諸過程、われわれが状況やできごと・事物をその諸性質や情調において直接に全体として取扱い、それらを感じし所有し賞味するところの、日常生活の諸過程こそ、もはや他の何ものかのための媒介的・手段的な位置にあるものではなくて、それ自体目的としてわれわれの関心を無限に惹きつけるものである。それは無限の深みと広がりを含むものである。

## On Pre-reflective, Pre-conscious Action(1.)

Toshio KINEFUCHI\*

### ABSTRACT

In this study, I try to make clear the structure — a certain unity or course — of the sort of actions preceding reflective inquiries. This sort of actions, which I call “pre-reflective or pre-conscious”, not only covers almost all the part of our everyday life-process, but we find out some of the most precious values of our life in this sort of actions. How we, pre-consciously behaving, regulate or arrange such an unity or course of action? When and how we come to be aware of “problematic” qualities of the situation in which we act pre-consciously? When and how does our reflective inquiry into problems of the situation begin? These are the problems, for example, which I try to make clear in this study.

This paper is the first half of this study.

---

\* Division of Foundations